

まちとしての大学をめざして/ バリアをやわらげる体芸食堂のリニューアル

渡 和由
芸術学系助教授

心のふるさととしてのキャンパスへ

筑波大学を修了して20年になります。赴任してきた4年前、入学した当時新鮮な輝きを放っていた大学の建物もかなり歳をとったなという印象がありました。それは単に建物が老朽化しただけでなく、建築や都市のデザイン実務に日本と米国でそれぞれ8年間関わりながら、いろいろな空間体験してきた私自信の見方が変わっていることが見え方の変化をもたらしているのでしょうか。研究室の窓から外を見て、ここで何年か最大20年以上も過ごすことになるなら住民として、研究の拠点として働き甲斐のある場所、生き甲斐を感じる楽しい場所にならないものだろうかと思いました。毎年入学してくる学生たちは、私が入学した時と同じように、新しい生活を始めて思い出の場面をつくる場所になるのです。多感な学生たちにとっては大学やつくばの空間が心のふるさとになるでしょう。折しも平

成12年に冨江副学長のもとにキャンパスリニューアルのプロジェクトチームが組織され、私も建物・設備ワーキンググループの委員に任命され、いくつかのリニューアル、新築建設プロジェクトに施設部の方々の協力を得ながら委員のひとりとして関わってきました。そこで今回のトピックである通称体芸食堂（体芸福利厚生棟）のリニューアルを同委員で建築家でもある芸術学系の貝島先生と昨年の晩秋からはじめることになりました。

才能の逃げない魅力的な大学環境に

筑波大学は日本でもまれにみる恵まれた広大なスペースに建てられており、これは卒業生として誇りに思うことです。反面、つくば市全体と同様に人々の交流のある親密な都市的雰囲気には欠けると思うのです。人や車を通過交通させる立派な「ロード」は多いのですが、人の集まる商業やサービス施設に囲まれたフレン

ドリーな「ストリート」は無いに等しいと思っています。公園や広大な広場／緑地はあっても、その眺めをお茶など飲みながら楽しむ室内と屋外の融合した空間が無いのです。つくば市で唯一その都市型「ストリート」を実現できそうなところが筑波大学であると思っています。

大学の中心軸メイン・ペDESTリアン（以下ベデ）は、建物に囲まれて「ストリート」を形成する空間特性を備えています。ただし、現状のままでは単なる通路でしかありません。人が集まったり、お茶を飲んだり、食事をしたりするインテリア空間が面していなければ魅力的な都市のストリートにはなりません。米国の都市デザインでは日常のアメニティをもたらす小さな商業空間が「才能が逃げないまちづくり」に有効で、箱ものと呼ばれる文化施設など以上に重要視されています。

筑波大学では幸い樹木が育った広場や池などすばらしい資源に溢れています。ほとんどの福利厚生施設が屋外空間と隣接し、ベデに近いところに位置しています。まず、そうした空間資源を活かして魅力的な空間づくりを進めることが重要であると考えました。商業施設は大学では福利厚生施設にあたります。その代表格が食堂と売店です。食堂は食事をするだけでなく、会話をしたり、芸術活動を

発表したりする人を引き付ける文化施設にもなりえます。

大学はまちとしてとらえられ、学生も教官も職員もその住民であると考えました。大学は研究と教育の場ですが、勉学に集中する場所と共にリラックスして交流する場所づくりによって生まれる日常のアメニティの向上が、今後の少子化、独法化、東京への学生の流失を抑え、さらに研究と教育の成果を上げるために有効ではないかと思うのです。そのため「大学をまちにする」ことは生き残りのためにも必要と考えます。

ニーズ発掘アイデア募集ワークショップ

参加型のリニューアルという副学長からの要望もあり、社会工学系の小場瀬先生が中心となって行った第2学群食堂リニューアルに続いて、体芸食堂リニューアルでも公開ワークショップを開いて広く意見と要望を集めることにしました。隠れたニーズを予想し、ボランティア候補学生の協体制と意識を強化するためにも、事前に学群の設計課題で資料集めや模型制作などの基礎資料をつくり、学生のアイデアを自由に募り、その後3回の公開ワークショップに臨みました。

食についての問題意識の高い体育科学系の松元先生の協力を得て体育の学生と

教官にも参加していただき、関係の事務官、テナント、芸術系サークル連合や大学新聞、他学群の学生と教官の参加もありました。仮説的方針を示した方が具体的なアイデアが出やすいと考え、大学をまちにする考え方を説明し、教官も住民として同レベルで参加している姿勢を述べ、空間、食、イベント、ビジネスなどのグループを設定し、福満先生、山本先生など芸術学系の先生にもグループリーダーをお願いしました。延べ約200人の副学長を含む教官と職員、学生参加者が入り乱れて問題指摘型要望だけでなくアイデアを出し合いました。その後、要望とアイデアを持ち帰り、ワーキンググループの学生がまとめてホームページに掲載するなどの作業を行い、貝島先生の指導のもと非常勤講師の西沢先生、グラフィックデザイナーの黒田さんの協力も得ながら大学院の計画ボランティアが中心となって設計案を作成していきました。食堂の用途を超えた音楽イベントやアート展示などの要望も関連事務担当者が積極的に受け止めてくれ、打ち合わせを私たちも持ち回りで行いました。

3回目で計画案を説明し、アートワークと呼ぶ建設ボランティアを募集し、食堂の重要な中身である食については施設リニューアル完了後に改めてワーショッ

プを開くことを課題としワークショップを終えました。文科省が推奨する施設の弾力的利用のアイデアが出そろった感もありました。そして参加してくれた学生の意欲と教官の熱意も感じ、意欲ある建設ボランティアの獲得に成功しました。

工事に協力する学生アートワーク隊

アートワーク・ボランティアは芸術専門学群と研究科の学生を中心に体育や他の学群生も含め延べ約150人の参加者が危険のない範囲での工事過程に参加しました。まずは設計ボランティアの作った色彩展開図をもとに塗装職人の指導を受けながら天井と壁と家具の塗装を週末2回に分けて計4日間行い、芸術学系の鈴木先生の指導のもとに外部広場の芝張りや樹木の植え込みを1日行いました。この過程は新聞社からも取材を受け地方版に掲載されました。「学生時代からの夢だった」と語る体育科学系の嵯峨先生にはワークショップから建設まで参加いただき、アートワーク・ボランティアをひとつのレクリエーションとして、終わったあとの屋外パーティまで企画してくれました。パーティは体育科学系の齋藤慎一先生、河村先生ほか体育センターや栄養学研究室のみなさんに協力いただき、完成後の食のワークショップへの展開に

つながりました。

計画案の半分以上を減額し、このアートワークは限られた工事費のなかで、学



食堂内部の塗装作業



広場の芝張り作業



作業後の屋外パーティ

生の手でできるところは自分達で作ろうという苦肉の策であったのです。実際行ってみると作業のきびしさと共に自分達の手でつくったという愛着と達成感を感じることができました。また職人や教官、学群の枠を超えた学生達の交流が作業をおして行えたことも予想以上の成果となりました。

行為をデザインしていく

食堂とアートスペースの融合をめざした空間改修として、絵画や写真をモチーフにして色を選択した室内のカラフルな塗装、イベントを行えるようスクリーン・厨房のしきり・入り口・ピクチャーレールの追加、3階カフェ・カウンター復活、外部デッキと外部椅子の追加によるオープンカフェ化、バルコニーのカウンター、アートサイン、学内中古家具の再利用、壁削除と芝斜面による隣接広場の改修などを完成させました。後はコンテンツです。イベント企画の他に学生によるテナントとの協同カフェ企画やエコマネー計画なども出て来ています。

6月のワールドカップ日本戦初日には観戦イベントがボランティア学生の企画運営とテナントの協力で行われ900人にも及ぶ全学の学生、教官、事務官が一体となって新しい空間で高橋体育専門学群

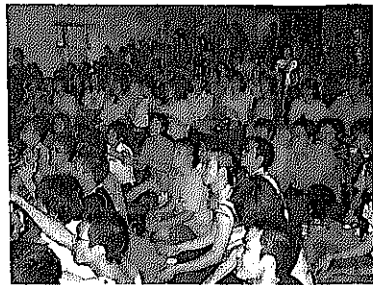
長の元気なあいさつに始まり盛り上がり
ました。ジャズ演奏、ダンスパフォーマ
ンス、写真展示なども同時に行われリ
ニューアルされた食堂の使い方を示す
キックオフイベントとなりました。またそ
の後は学群課題発表展示、ジャズ演奏付き
芸術学系のパーティなどにも使用されてい
ます。芸術の中村茂先生のようにゼミを屋

外デッキで行なう動きなども出ています。

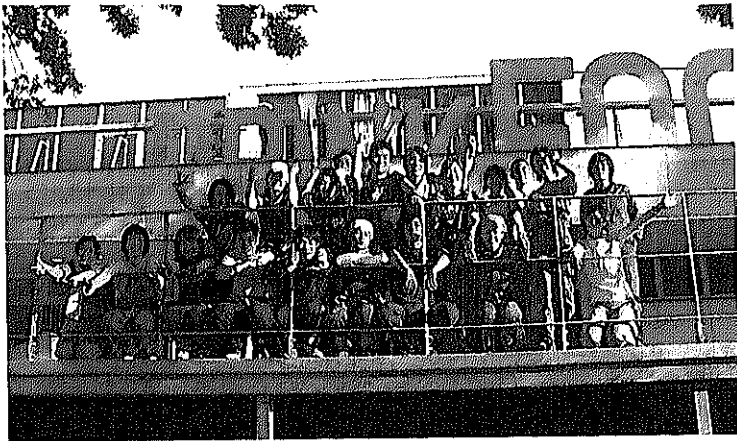
中身強化策として、ワークショップ初
期の段階から無線LANやアートスペ
ース運用の可能性について参画していただ
いた物質工芸系の古谷野先生からはグラ
ンドピアノを寄付していただきました。
厚生課や体芸学生担当の理解と協力で秋
に体芸食堂に設置され使われており、さ



新設デッキでの観戦風景
(写真提供：体育科学系長谷川聖修先生)



食堂アートスペースでの観戦風景
(同左)



アートワーク終了後の記念写真

らに体芸食堂の立地特性を活かした芸術系サークルの要望も満たす画期的なアートスペースが生まれる可能性ができました。

体芸食堂では、大学内の分野や所属のバリアを超え、そこで行われる行為をデザインしたかったのです。バリアが少しとれて柔らかくなった施設の空間をいかに運用し、楽しい場所としてモラルをもって利用し続けていくかが今後の最大の課題です。

食のメニューを改善していくという課題が残されています。9月にピアノのお披露目コンサートを兼ねた食を改善し提案していくイベント型ワークショップ「フードピア/ソウルフード・シンポジウム」を体育科学系齋藤慎一先生の栄養研究室と芸術の教官学生チームが共同で開催し、試食会や楽しくも本音の白熱した議論が学生の間で行われました。参加された富江副学長と石井芸術専門学群長は音楽と美術と体育の融合と可能性について、最後に高木副学長からこうした活動や研究におけるパッションの必要性を共感いただき、ワークショップ参加者の励みになりました。すでに次の運用アイデアとワークショップも企画中です。体芸食堂のリニューアルはこれからが本番です。

(わたりかずよし 環境デザイン)



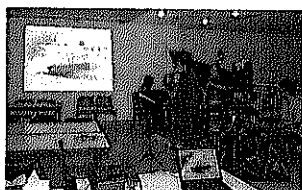
フードピアのデッキでの試食会とアンケート



ボランティア学生に感謝状を渡す富江副学長



学生が熱く語り合う食のシンポジウムの風景



学生によるピアノ寄付お披露目ジャズ演奏会